

2026 年 1 月 26 日

五十嵐 啓太

バレーボール戦術の歴史的変遷

——サーブと攻撃パターンの進化を中心に——ミュンヘンオリンピックにおける日本男子バレーボールの金メダル獲得要戦術的革新と組織マネジメントを手がかりに

目次

第 1 章 序論：研究の背景と目的

1.1 研究の背景・動機 1.2 研究の目的と本稿の視点

第 2 章 「高さ」という絶対的制約と日本の課題

2.1 バレーボールにおける身長とネットの意味
2.2 日本男子が直面していた構造的不利

第 3 章 日本による「攻撃」の革命：速攻とコンビネーションの形成

3.1 高さへの挑戦とクイックの誕生 3.2 時間差攻撃と「一人時間差」の発明
3.3 「空間」から「時間」へ：戦術思想の転換

第 4 章 ミュンヘン金メダルへの道：敗北からのパラダイムシフト

4.1 1964 年東京オリンピックの現実 4.2 メキシコ五輪での銀メダルと限界

第 5 章 「8 年計画」という壮大な青写真：組織マネジメントの設計

5.1 計画の始動と長期的視野 5.2 「考えるバレー」への転換
5.3 人材の発掘と育成

第 6 章 戦術的イノベーションの完成：速攻と「だまし合い」

6.1 リード・ブロックへの対抗策としての時間差 6.2 ビッグ 3 の覚醒と自己犠牲
6.3 司令塔と守備職人：猫田・佐藤の機能

第 7 章 「ミュンヘンの奇跡」：準決勝ブルガリア戦と決勝東ドイツ戦

7.1 絶望的なスタートと「逆立ち」の約束 7.2 奇跡の逆転劇と精神的転換
7.3 決勝における戦術の完遂

第 8 章 世界による「サーブ」の反撃：攻撃の起点の変化

8.1 サーブの役割変化と守備側の戦術転換 8.2 ジャンプサーブの台頭

第 9 章 ルール改正によるサーブの攻撃化：ラリーポイント制の意味

9.1 サイドアウト制とラリーポイント制
9.2 「サーブミス＝即失点」がもたらした逆説

第 10 章 考察：日本の革新が招いた「イタチごっこ」の戦術史

第 11 章 結論：ミュンヘンから現代へ

参考資料・引用資料

第1章 序論：研究の背景と目的

1.1 研究の背景・動機

現代のバレーボールでは、ジャンプサーブ、時間差攻撃、クイックなど、多様な攻撃パターンが展開されている。これらの技術は現在では当たり前のように使われているが、それぞれがどのような経緯で誕生し、どのような問題意識のもとで発展してきたのかを体系的に学ぶ機会が少ない。筆者は、バレーボールをプレーする中で、こうした戦術が「なぜ存在しているのか」を知りたいと考えるようになった。この問いを歴史的に考えると、1972年ミュンヘンオリンピックにおける日本男子バレーボールの金メダル獲得(東スポnote)は、極めて象徴的な出来事である。準決勝ブルガリア戦でのセットカウント0-2からの奇跡的な逆転劇、そして決勝での東ドイツ(DDR)に対するセットカウント3-1での勝利した。2セットを先取されたあとに松平康隆監督が選手に放った、「あと2時間、コートに立っていたら勝てる」という言葉は今もなお語り草である(サンスポ)。しかし、この勝利の真価は、単なる試合結果の劇的さだけにあるのではない。当時のバレーボール界は、文字通り「巨人のスポーツ」であった。身長2メートルを超える選手を擁するソビエト連邦(現ロシア)や東ドイツなどの東欧勢が、圧倒的な高さで世界を支配していた時代である。これに対し、平均身長で10センチ以上劣る日本チームがオリンピック優勝したという事実は、当時のスポーツ界における「体格絶対主義」の常識を根底から覆すものであった。

1.2 研究の目的と本稿の視点

本研究の目的は、サーブおよび攻撃パターンの歴史的変化を明らかにし、それが試合の勝敗構造をどのように変えてきたかを考察することである。特に、日本が生み出した「クイック」や「時間差攻撃」がどのように世界を変え、それに対抗する形で「ジャンプサーブ」やパワーバレーがどのように発展したのかに注目する。さらに、1972年ミュンヘンオリンピックをケースとして、戦術的革新と組織マネジメントがどのように結びつき、世界一という結果を生み出したのかを分析する。本稿の視点は二つある。第一に、戦術は単独で成立するのではなく、相手の適応(対抗)を誘発しながら進化する、いわば「イタチごっこ」の連鎖であるという点である。第二に、その戦術を実戦で機能させるためには、選手の役割理解、信頼関係、長期強化といった組織マネジメントが不可欠であるという点である。ミュンヘンの日本代表は、戦術と組織の両輪がそろったことで、歴史的勝利に到達したと考えられる。

第2章 「高さ」という絶対的制約と日本の課題

2.1 バレーボールにおける身長とネットの意味

バレーボールという競技において、ネットの高さ(男子2m43cm)は、選手にとって絶対的な物理的境界線として存在する。ネットより高い位置でボールを操作できるか否か

は、攻撃の決定力と守備（ブロック）の有効性を決定づける最も重要なファクターである。バレーボールが初めて正式種目となったのは1964年東京オリンピックである。1963年日本チームの平均身長は181.6cmであった(福田ら, 2010, pp.31-38)。これに対し、世界のトップを走るソビエト連邦やチェコスロバキアといった強豪国の平均身長は190cmを超えており、中には2mを超える選手も珍しくなかった。わずか数センチの差と思われるかもしれないが、バレーボールにおける身長差は、手を上に伸ばした「指高（しこう）」の差となり、さらにジャンプ力を加えた「最高到達点」においては20cm以上の差となって現れる。

2.2 日本男子が直面していた構造的不利

ネット際での攻防において、常に相手に見下ろされる状態で戦わなければならない日本のハンデキャップは、絶望的なものであった。正攻法でぶつかれば、日本のスパイクは相手のブロックに阻まれ、相手のスパイクは日本のブロックの上を通過していく。これが、1960年代の日本男子バレーが直面していた冷厳な現実であった。この状況を単に「体格差」として受け止めるだけでは、戦術史の面白さは見えてこない。重要なのは、日本が不利を嘆くのではなく、競技の勝負の鍵を別のところへ移すことで、構造的な不利を相対化しようとした点である。言い換えれば、日本は「高さが重要なスポーツ」という前提そのものを揺さぶる方向へ、戦術の発想を転換していった。

第3章 日本による「攻撃」の革命：速攻とコンビネーションの形成

3.1 高さへの挑戦とクイックの誕生

1960年代、身長や体格で劣る日本男子チームが世界と戦うためには、高さに対抗する「速さ」が必要であった。1965年のソ連遠征時、セッターの直前で打つ「Aクイック」が大型ブロックに通用しなかったことから、日本代表の木村選手とセッター小泉選手は、セッターから2~3m離れた位置で打つ「Bクイック」を開発した。これにより、相手ブロッカーのマークを分散させることに成功した。1968年のメキシコ五輪では、日本チームのスパイク決定率は56%を記録し、Bクイックを使用する選手の決定率は60%を超えた。これは当時のバレーボール界において驚異的な数字であり、野球で言えばチーム打率4割に匹敵する成果であった(『月刊バレーボール』)。この記述から読み取れるのは、Bクイックが単なる「速い攻撃」ではなく、相手のブロック配置や注意配分を変えることで、攻撃全体の成功確率を底上げした点である。つまり、速攻は個人技ではなく、相手の守備構造を揺さぶるチーム戦術として設計されていた。

3.2 時間差攻撃と「一人時間差」の発明

クイック攻撃と同時に開発されたのが「時間差攻撃（当時は移動コンビネーション速攻）」である。これは、囷（おとり）となる選手が先にクイックに入って相手ブロックを引

きつけ、その直後に別の選手がスパイクを打つ戦術である。さらに1968年メキシコ五輪後の練習中、セッターのトスミス（高いトス）に対し、スパイカーがジャンプを一瞬こらえて打ったところ、ブロックがつかなかったという偶然から「一人時間差攻撃」が誕生した(毎日新聞)。この技術は1970年の世界選手権で披露され、非常に高い決定率を記録し、日本の金メダル獲得に貢献した。時間差攻撃の本質は、相手ブロッカーの「反応」を遅らせるのではなく、「反応させてしまう」ことにある。先に跳ばせ、跳んだ後の無防備な時間帯を作り出す。そこに打ち込む。つまり「相手の成功（ブロックのジャンプ）を利用して相手を失敗させる」逆転の発想である。一人時間差はその極致であり、同じ選手が「囷」と「決定打」を兼ねることで、相手の読みを完全に外すことができた。

3.3 「空間」から「時間」へ：戦術思想の転換

ここで重要なのは、日本の革新が「高く跳ぶ」方向ではなく、「早く終わらせる」方向へ向かった点である。相手ブロッカーがトスを見て跳ぶまでの時間、跳んで最高到達点に至るまでの時間、その合計よりも先にスパイクが打たれれば、ブロックは成立しない。日本は、勝負の舞台を空中の高さ（空間）から、ボールと身体が動く速さ（時間）へ移したのである。この転換は、後述するミュンヘンでの完成形、さらには世界の対抗策（サーブの攻撃化）へつながっていく。

第4章 ミュンヘン金メダルへの道：敗北からのパラダイムシフト

4.1 1964年東京オリンピックの現実

1964年、地元開催となった東京オリンピックで、日本女子代表（東洋の魔女）が金メダルを獲得し(JOC シリーズ連載「東京オリンピックから40年」)、日本中が歓喜に沸いた。その一方で、男子代表は銅メダルに終わった。銅メダル自体は立派な成績であるが、「お家芸」として期待されたバレーボールにおいて、女子の影に隠れる形となった男子チームの焦燥感は強かった。世界との差を痛感した関係者の中には、「日本人は体格で劣るため、これ以上上位に行くのは不可能ではないか」という諦めの空気すら漂っていたという。しかし、この閉塞感を打破しようと立ち上がったのが、後に監督となる松平康隆であった。松平は、既存の「高さには高さで対抗する」という発想（オープンバレー）を捨て去り、まったく新しい概念を導入する必要性を痛感していた。

4.2 メキシコ五輪での銀メダルと限界

松平体制の下、日本チームは1968年のメキシコシティーオリンピックに向けて強化を進めた。この過程で、日本は徐々に速攻やコンビネーションバレーの原型を取り入れ始めていた。その結果、メキシコ五輪では銀メダルを獲得することに成功する。しかし、決勝戦ではソビエト連邦に敗れた。銀メダルという結果は、世界2位であることを証明したが、同時に「現在の延長線上ではソ連には勝てない」という残酷な事実をも突きつけた。

ソ連の圧倒的な高さとパワーの前には、当時の日本の戦術も通用しきれなかったのである。松平は、この敗北から「世界一になるためには、世界中の誰もやっていないバレーボールをやるしかない」という結論に至った。これは、単なる戦術の修正ではなく、バレーボールという競技の定義そのものを書き換えるような、根本的なパラダイムシフトへの挑戦であった。ここで注目すべきは、銀メダルが「成功」でもあり「限界」でもあった点である。戦術が一定程度通用したからこそ世界2位になれた。しかし、決勝では「高さ」の現実が最後に立ちはだかった。松平はこの矛盾を直視し、「世界一になるには、戦術を“少し”変えるのではなく、世界の常識を“ひっくり返す”必要がある」と判断したのである。

第5章 「8年計画」という壮大な青写真：組織マネジメントの設計

5.1 計画の始動と長期的視野

松平康隆が掲げた強化策は、その場しのぎの勝利を目指すものではなく、「8年計画」と呼ばれる極めて長期的なプロジェクトであった。これは、1964年東京五輪の翌年、1965年からスタートし、1972年のミュンヘン五輪で金メダルを獲得することを最終目標とした壮大なロードマップである。松平は著書の中で、「ミュンヘン・オリンピック作戦は、まさにこの（メキシコ五輪後の）四年間をどう過ごすかにかかっていた」と述べている（松平, 1981, p.40）。この計画は、大きく前期の4年（東京～メキシコ）と後期の4年（メキシコ～ミュンヘン）に分けられる。前期においては、基礎体力の向上と、世界レベルで戦うための最低限の技術習得が主眼とされた。そして、メキシコでの銀メダル獲得を経て、後期の4年間は、世界を驚愕させる「日本独自の戦術」の完成と、金メダルにふさわしい「精神力」の養成にすべてが捧げられたのである。

5.2 「考えるバレー」への転換

松平の指導哲学の根底にあったのは、「根性」と「科学」の融合であった。当時の日本のスポーツ界は精神論が支配的であり、「水を飲むな」「うさぎ跳びをしろ」といった非科学的な指導が横行していた。松平もまた、猛練習を課すことでは誰にも負けなかったが、その練習には常に明確な「意図」と「理論」があった。松平は選手たちに対し、ただ盲目的に指示に従うのではなく、自ら考え、判断することを求めた。なぜなら、コート上では監督はプレーできないからである。瞬時の判断が求められる試合中に、ベンチの指示を待っているのは手遅れになる。後に松平は、金メダル獲得の要因として、選手との信頼関係に触れ、「選手諸君は、わたしを信頼し、わたしのいうことに賭けてくれた」と述懐している（松平, 1981, p.201）。この「考えるバレー」は、戦術の高度化と相性が良い。速攻や時間差は、決められた型をなぞるだけでは成立しない。相手ブロックの反応、レシーブの乱れ、トスの高さなど、状況が少し変わるだけで最適解が変わるからである。したがって、戦術の革新と、選手の主体性（判断力）を育てるマネジメントは、互いに補完関係にあると言える。

5.3 人材の発掘と育成

8年計画を遂行するためには、それを実行できる選手が必要であった。松平は全国を回り、有望な若手選手を発掘した。その中で見出されたのが、後に「ビッグ3」と呼ばれることになる大古誠司、森田淳悟、横田忠義といった大型選手たちである。彼らはそれぞれ強烈な個性を持っていた。大古は圧倒的なパワーと跳躍力を持つが粗削り、森田は知性的だが線が細い、横田は万能だが地味。松平はこれらの個性を否定するのではなく、それぞれの長所を最大限に伸ばしつつ、チームという一つの生命体の中に組み込んでいくマネジメントを行った。特に、190cm台の大型選手を複数揃え、彼らに器用なプレーを習得させるという方針は、当時の日本では画期的なことであった。大きい選手は動きが鈍いというのが定説であったが、松平は「大きくても速く動ける選手」を育成することで、世界の高さに対抗しようとしたのである。ここで注目すべきは、「体格差に対抗するために、あえて大型選手を育てる」という、一見矛盾したような方針である。つまり松平は、単に日本の弱点を補うのではなく、世界標準（高さ）にも近づきつつ(JOC,心に残るオリンピックシーン)、日本独自の武器（速さとだまし）も強化する、二重の戦略をとっていた。この二重性が、ミュンヘンでの完成度を高めた要因の一つだと考えられる。

第6章 戦術的イノベーションの完成：速攻と「だまし合い」

6.1 リード・ブロックへの対抗策としての時間差

当時、ソ連や東欧諸国は、相手のトスを見てからブロックに跳ぶ「リード・ブロック」の技術を高めていた。日本の速攻に対しても、彼らは徐々に適応を見せ始めていた。速いだけの攻撃ではいずれ捕まる。そこで日本が開発したのが、「時間差攻撃」である。これは、一人の選手が囷（おとり）として速攻の動きでジャンプし、相手ブロッカーの注意を引きつけてジャンプさせた後、その空いたスペースやタイミングのズレを利用して、別の選手がスパイクを打つ戦術である。この戦術の核心は、相手ブロッカーを「騙す」ことにあった。松平はバレーボールを「だまし合いの芸術」へと昇華させようとしていた。複数のアタッカーが複雑に交差しながら助走に入るコンビネーションバレーは、相手ブロッカーにとって、誰が本当に打ってくるのか判別不能な状況を作り出す。特に、森田淳悟が完成させることになる「一人時間差」は、この「だまし合い」の極致であった。通常は二人で行う時間差攻撃を、一人で行う。一度ジャンプすると見せかけてフェイントを入れ、ブロッカーが釣られて跳んだ後に、改めて自分が跳んで打つ。この0.数秒のズレが、2mの巨壁を無力化する魔法の杖となったのである。

6.2 ビッグ3の覚醒と自己犠牲

松平バレーの完成には、世界に通用する攻撃力を持ったタレントの存在が不可欠であった。その中心にいたのが、森田淳悟、横田忠義、大古誠司の3人、通称「ビッグ3」であ

る。しかし、彼らは最初から完成されたチームプレイヤーだったわけではない。個性の強い彼らが、いかにして「フォア・ザ・チーム」の精神を宿し、有機的に機能するようになったのか。その過程にこそ、松平の組織マネジメントの真髓がある。森田淳悟は、日本バレーボール史上最高の発明とも言われる「一人時間差」の創始者である。しかし、彼がその境地に達するまでには、エースとしてのプライドとの葛藤があった。当初、森田は自らの滞空力と強打に絶対的な自信を持っており、チームのために「囃（おとり）」となって飛び、味方に打たせるという役割に抵抗を感じていた時期がある。松平はそんな森田に対し、繰り返しこう説いた。「スターは出るかもしれないが、スーパースターになるには、誰かのために生きる必要がある」（松平, 1981, p.20）。自分が打つふりをして相手ブロックを引きつけ、味方のスパイクをノーマークにする。その「献身」こそがチームを勝たせる唯一の道であり、それを受け入れた時、選手としてもう一段上のレベル（スーパースター）に行けるという教えである。森田はこの言葉を受け入れ、徹底的に囃としての動きを磨いた。そして皮肉にも、彼が囃として優秀になればなるほど、相手は森田を無視できなくなり、逆に森田自身が打つ「一人時間差」が決定的な威力を発揮するようになったのである。ミュンヘン大会終了後、松平は森田に対し「今大会はお前に負けた」と語りかけている（松平, 1981, p.25）。これは、かつてのエースが、自分の得点だけでなく、チーム全体の勝利のために黒子に徹することも厭わない、真のリーダーへと成長したことへの最大限の賛辞であった。横田忠義もまた、松平バレーの中で難しい役割を担った選手である。彼は大古のような派手な爆発力や、森田のようなトリッキーな技を持つ一方で、攻守のバランスが取れた極めて知的なプレーヤーであった。松平は、個性の強人大古や森田を自由に暴れさせるために、横田にはあえて「調整役」や「チームの支え役」を求めた。横田は「ほめたい気持ちはわかるが、一番照れくさいんだ」と語り（松平, 1981, p.30）、自らの活躍が新聞の見出しになることよりも、チームが円滑に機能することを優先した。彼のような、実力がありながらもエゴを抑え、チームの潤滑油になれる存在が「ビッグ3」の一角にいたことが、日本チームの崩壊を防ぎ、結束を強固なものにした要因である。「世界の大古」と呼ばれた大古誠司は、チーム最年少のアタッカーであり、理屈抜きのパワーと高さが武器であった。松平は、繊細な指導が必要な森田や横田とは対照的に、大古には細かい戦術論よりも、その野性的な闘争本能を刺激する指導を行った。準決勝のブルガリア戦、セットカウント0-2の崖っぷちで、大古は自らをこう鼓舞した。「松下（電器）とやる時のように、俺と森田がいて負けるわけにはいかない」（松平, 1981, p.32）。当時、国内リーグ（日本リーグ）では大古・森田の所属する日本鋼管と、横田・木村らの所属する松下電器が激しいライバル関係にあった。大古は、国家代表としてのプレッシャーがかかる場面で、あえて身近なライバル対決の闘争心を呼び起こすことで、恐怖心を克服したのである。このように、松平は選手の性格を見極め、ある者は理論で説得し、ある者は本能を解放させるという、個別に最適化されたモチベーション管理を行っていた。ここには、戦術的革新を「やり切る」ための心理的設計がある。どれほど優れた戦術でも、選手が納得

し、役割を引き受け、修羅場で実行しない限り勝利には結びつかない。ビッグ3の覚醒は、戦術と組織の接点として位置づけられる。

6.3 司令塔と守備職人：猫田・佐藤の機能

「ミュンヘンの金メダルは、猫田なくしてあり得なかった」と語られるほど、セッター猫田勝敏の存在は絶対的であった。彼は正確無比なトスワークで「コンピューター」の異名をとったが、ミュンヘン大会中、彼は選手生命を脅かすほどの危機に直面していた。右腕の骨折である。セッターにとって手首や腕の怪我は致命傷である。しかし、猫田はその事実をチームメイト（ごく一部を除く）にも隠し通した。試合前には痛み止めの注射を打ち、感覚の麻痺した腕で、ミリ単位のコントロールが要求されるトスを上げ続けた（松平, 1981, p.42）。痛みに顔を歪めることもなく、淡々とプレーする猫田の姿は、事情を知る松平や一部のスタッフにとって、涙なしには見られないものであった。猫田のこの「沈黙の犠牲」は、チーム全体に「言い訳は許されない」という無言の規律を生み出し、極限状態での精神的支柱となった。攻撃陣が華々しく活躍する一方で、守備専門のスペシャリストとしてチームを支えたのが佐藤哲夫である。松平は彼を「守りのスペシャリスト」と位置づけた（松平, 1981, p.54）。佐藤自身、「自分は一点も取れない選手だ」と自嘲気味に語ることがあったが、それは裏を返せば「自分が拾わなければ一点も生まれない」という強烈な自負の表れでもあった。彼が開発した「回転レシーブ」は、強烈なスパイクをレシーブした勢いを殺さずに、そのまま回転して次の動作に移る画期的な技術であり、これにより日本の守備範囲は飛躍的に拡大した。「攻撃は最大の防御」と言うが、松平バレーにおいては「鉄壁の守備こそが最大の攻撃の起点」であった。佐藤が拾い、猫田が上げ、ビッグ3が決める。この完全な分業体制の確立こそが、組織としての完成形であった。

第7章 「ミュンヘンの奇跡」：準決勝ブルガリア戦と決勝東ドイツ戦

7.1 絶望的なスタートと「逆立ち」の約束

そして迎えた1972年ミュンヘン。予選リーグを順当に勝ち上がった日本は、準決勝でブルガリアと対戦する。この試合は、日本バレーボール史において、最も劇的かつ、最も危険な試合として記憶されている。9月8日、準決勝。日本は予想外の苦戦を強いられた。ブルガリアの高いブロックと強力なサーブにリズムを崩され、第1セット、第2セットを連取されてしまったのである。セットカウント0-2。あと1セット取られれば敗退が決まる。しかも第3セットもリードを許し、点差が開いていく。会場の空気は「日本の敗北」で固まりつつあった。選手の動きは硬く、得意のコンビネーションも決まらない。「8年間の努力が、ここで終わるのか」。絶望的な空気がコートを支配した。この絶体絶命のピンチで、松平はタイムアウトを取った。戦術的な指示をする時間はもはやない。選手たちの顔面は蒼白で、ガチガチに緊張していた。そこで松平が口にした言葉は、誰も予想しないものであった。「おい、この試合に勝って金メダルを獲ったら、俺はコートで逆立ちしてや

るよ」この土壇場での突拍子もない提案（松平, 1981, p.37）に、選手たちは呆気にとられ、そして苦笑した。しかし、この一瞬の「弛緩」が、極度の緊張で固まっていた彼らの呪縛を解いたのである。

7.2 奇跡の逆転劇と精神的転換

「監督に逆立ちさせてやろうじゃないか」。チームに再び火がついた。松平監督の「逆立ち」発言によって呪縛から解き放たれた日本チームは、第3セット中盤から猛烈な追い上げを見せた。ここで松平は、動揺する若手を落ち着かせるため、ベテランの南将之や中村祐造を投入する采配を見せた。彼らの経験値が、パニックになりかけたコート内の秩序を回復させた。息を吹き返した日本は、猫田勝敏のトス回しが冴え渡り、森田淳悟の時間差攻撃、大古誠司の強打が次々と決まり始める。第3セットを奪い返すと、完全に流れは日本へと傾いた。第4セットも連取し、セットカウント2-2。運命のファイナルセット、日本はブルガリアを圧倒した。体力的には限界に近かったはずだが、勝利への確信が身体を動かしていた。最後はセットカウント3-2の大逆転勝利。試合終了後、選手たちは抱き合って喜んだが、その目には涙よりも「安堵」の色が濃かった。この死闘を制したことで、日本チームには「あれだけの地獄から生還したのだから、もう怖いものはない」という、技術を超越した精神的な強さが備わったのである。この場面は「気合」や「根性」の物語として語られがちだが、本稿の観点から見ると、組織マネジメントの成果として理解できる。長期計画の中で役割と信頼を作り、修羅場で「自分の役割を果たせば勝てる」という確信を持たたからこそ、あの逆転が現実になった。逆立ち発言は偶然のアドリブに見えるが、選手の緊張を外し、再び「考えるバレー」を取り戻させる装置として機能したとも解釈できる。

7.3 決勝における戦術の完遂

1972年9月9日。ミュンヘン・オリンピック男子バレーボール決勝戦。対戦相手は東ドイツ（DDR）であった。予選リーグでも対戦し、日本を苦しめた相手である。東ドイツは組織的で正確なバレーを展開し、高さとパワーも兼ね備えた強敵であった。決勝戦の日本は、準決勝とは打って変わって冷静であった。松平は選手たちに「今までやってきたことを出すだけだ。楽しんでこい」と送り出した。第1セット、日本はスタートから「8年計画」の集大成を見せつけた。Aクイック、Bクイック、パイプ攻撃（バックアタック）、そして森田の一人時間差。猫田が操るこれらの攻撃は、まるで精密機械のように機能し、東ドイツの長身ブロッカーたちを翻弄した。東ドイツの選手たちは、目の前で繰り上げられる「見たこともないバレー」に、誰をマークすべきか判断できず、次々と空中で置き去りにされた。第1セットを日本が先取。第2セットこそ東ドイツの猛攻で奪われたものの、第3セット以降、日本は再び主導権を握る。勝負の分かれ目となったのは、やはり「ビッグ3」の躍動であった。特に効果的だったのが、森田の「一人時間差」である。勝

負どころで繰り出されるこの魔球に対し、東ドイツのブロックは完全にタイミングを狂わされた。森田が囷として機能することで、大古や横田へのマークも甘くなり、どこからでも点が取れる状態となった。第4セット、マッチポイント。猫田からのトスを横田が叩き込み、試合終了。セットカウント3-1。その瞬間、コート上には歓喜の輪ができるよりも早く、松平監督が選手たちの手によって宙に舞った。松平は著書の中で、この時の心境を詳細に語るよりも、選手一人ひとりへの感謝と信頼の言葉（松平, 1981, p.201）をもって振り返っている。胴上げされる松平の目には涙が溢れていた。8年間の苦闘、メキシコの悔しさ、そして選手たちへの感謝。すべてが報われた瞬間であった。松平が約束通り「逆立ち」をしたかどうかは定かではないが、彼と選手たちは、世界のバレーボールの常識をひっくり返す（逆立ちさせる）ことには間違いなく成功したのである。

第8章 世界による「サーブ」の反撃：攻撃の起点の変化

8.1 サーブの役割変化と守備側の戦術転換

かつてサーブは単なる「プレーの開始合図」に過ぎなかった。しかし、日本開発のコンビネーションバレー（クイック・時間差）が世界に普及すると、レシーブを正確にセッターへ返せば、攻撃側が圧倒的に有利な状況が生まれた。つまり、「完璧な一段目」が保証される限り、攻撃側は時間差や速攻を自由に使える。守備側はブロックの高さや反応を磨くだけでは追いつかなくなり、「そもそも相手に自由な攻撃をさせない」方向へ発想を転換する必要に迫られた。その最初の入口がサーブである。サーブでレシーブを崩し、セッターへ返るボールの質を落とす。そうすれば速攻の選択肢が減り、相手の攻撃は単純化し、ブロックが間に合う。ここでサーブは「守備のための攻撃」、すなわちラリー全体の主導権を奪う武器へと位置づけが変わっていった。本稿の枠組みで言えば、日本の攻撃革新が「守備側の革新（サーブ攻撃化）」を誘発したのである。

8.2 ジャンプサーブの台頭

サーブ戦術の転換点となったのは1984年のロサンゼルス五輪である。ブラジルやアメリカの男子チームは、強烈なスパイクサーブである「ジャンプサーブ」を組織的に導入した。ジャンプサーブとは、エンドライン後方からボールを高く放り上げ、助走をつけてジャンプし、空中の最高到達点でボールを強く叩くサーブである。フォームやインパクトの強さがバックアタック（後衛のスパイク）とほぼ同じであるため、ボールの初速は時速100kmを超えることも珍しくない。従来のフローターサーブが「揺れ」で崩すのに対し、ジャンプサーブは圧倒的な「威力とスピード」でレシーバーを弾き飛ばすことを目的としている。吉田ら（2004）の研究によれば、ジャンプサーブ自体は1950年代から存在したが、ロス五輪を機に「コンビネーション攻撃を封じるための有効な武器」として世界的に定着したとされる。これにより、バレーボールは「変化」で崩す時代から、「威力（パワー）」で制圧する時代へと突入した。ここで重要なのは、「サーブが強くなった」という現

象の背後に、ミュンヘンで完成した日本型コンビネーションへの対抗という戦術的必然がある点である。日本が作った“時間のスポーツ”に対して、世界は“時間を奪うサーブ”で応じた。サーブで一段目を乱し、時間差や速攻を成立させない。こうして、サーブはラリーの主導権を決める最初の攻撃になったのである。

第9章 ルール改正によるサーブの攻撃化：ラリーポイント制の意味

9.1 サイドアウト制とラリーポイント制

1990年代以降のルール改正もサーブの攻撃化を加速させた。特に1999年の「ラリーポイント制」導入の影響は決定的であった。ここで、旧ルールとの違いを明確にしておく。

- **サイドアウト制（旧ルール）**： サーブ権を持っているチームがラリーに勝った場合のみ得点が入るシステム。サーブ権がない側（レシーブ側）がラリーを制しても、得点は入らず「サーブ権が移動（サイドアウト）」するだけであった。そのため、試合時間が長引く傾向があった。
- **ラリーポイント制（現行ルール）**： サーブ権の有無に関わらず、ラリーに勝ったチームに即座に得点が入るシステム。

9.2 「サーブミス＝即失点」がもたらした逆説

旧ルールではサーブミスをして相手にも得点は入らなかったが、ラリーポイント制では「サーブミス＝即失点」となる。一見、ミスを恐れて安全なサーブが増えると思われたが、世界の潮流は逆であった。「攻めなければ相手の高度な攻撃で確実に失点する」ため、リスクを負ってでも強力なサーブで崩しに行く傾向が強まったのである。下永田ら（2007）の研究でも、ラリーポイント制におけるサーブは、試合の流れや勝敗に及ぼす影響力が非常に大きくなっていることが示唆されている。この逆説は、戦術史の観点から非常に面白い。ルールは本来、試合を分かりやすくし、時間を管理し、興行性を高めるために変更されることが多い。しかし、ラリーポイント制は結果として「攻撃的なサーブ」を促進し、ラリーの速度と圧力をさらに高めた。つまり制度変更が戦術環境を変え、戦術環境がさらに制度の意図とは異なる方向に進化していったのである。現代バレーの高速化は、戦術だけでなく制度によっても後押しされたと言える。

第10章 考察：日本の革新が招いた「イタチごっこ」の戦術史

バレーボールの戦術史を振り返ると、攻撃と守備の「イタチごっこ」の歴史であることがわかる。日本は「高さ」という身体的不利を補うために、クイックや時間差といった「速さとコンビネーション」を進化させた。しかし、その日本型バレーが完成されたことで、世界はそれを封じるための「強力なサーブ（ジャンプサーブ）」を進化させることになった。つまり、日本が攻撃戦術を極めたことが、逆説的に現代のパワーバレーやビッグサーバーの時代を招いたと言える。さらに、ミュンヘンの勝利は「戦術が優れていたから」

だけでは説明できない。ビッグ3の役割分担、猫田の沈黙の犠牲、佐藤の職人的守備、そして控え選手を含めたスペシャリスト活用など、組織としての完成度があったからこそ、戦術は修羅場で崩れなかった。準決勝ブルガリア戦は、その典型である。技術だけなら崩壊してもおかしくない場面で、チームは立て直した。そこには長期計画で作られた信頼と、選手の主体性（考えるバレー）があった。言い換えれば、戦術史を「技の発明史」として見るだけでは不十分であり、戦術を支える組織や人間関係の史（マネジメント史）としても捉える必要がある。ミュンヘンの日本代表は、その両面を示す教材的な事例である。

第11章 結論：ミュンヘンから現代へ

本研究では、攻撃とサーブの歴史的変遷を調査し、1972年ミュンヘンオリンピックの日本男子金メダル獲得を手がかりに、戦術的革新と組織マネジメントの結びつきを考察した。結論として、以下の三点が重要である。第一に、日本発祥のクイック・時間差攻撃は、バレーボールを「高さの競技」から「速さと時間の競技」へと変革させた。これは、体格差という構造的不利を「時間」で無効化する戦術革命であり、ミュンヘンで完成形に到達した。第二に、その完成は偶然ではなく、松平康隆の「8年計画」に代表される長期的・段階的な強化と、「考えるバレー」を軸とした信頼関係によって支えられていた（松平, 1981, p.40; p.201）。戦術は紙の上の設計図ではなく、人間が実行して初めて武器になる。その前提を満たした組織作りが勝因として大きい。第三に、日本の革新は世界の対抗策を誘発し、ジャンプサーブの台頭とルール改正（ラリーポイント制）を通じて、サーブを「第一の攻撃」へと押し上げた。吉田ら（2004）、下永田ら（2007）の研究が示すように、現代バレーにおいてサーブは流れと勝敗を左右する決定的要素となっている。かつてのような劇的な新戦術の誕生やルールの抜本的な改変は、現代バレーにおいては起こりにくいかもしれない。しかし、それはバレーボールという競技が戦術的に成熟したことを意味する。今後は、これまでに確立された「攻撃」と「守備」の技術を、いかに高い精度で遂行できるかという、より洗練された質の高い攻防へと深化していくと考えられる。ミュンヘンの金メダルは、単なる過去の栄光ではなく、戦術と組織、そして信頼が結びついたときに常識が覆るという事実を示す、今なお有効な指針なのである。

参考資料・引用資料

- 東スポ note
<https://note.tokyo-sports.co.jp/n/nf3d9ae174ffb>
- サンスポ
<https://www.sanspo.com/article/20250117-OVPAFHA6A5P3ZGX4SZ7UK74BIM/>
- 福田隆, 糸岡夕里, 遠藤俊郎「[バレーボールワールドカップ2007男子における出場チームの特徴と試合結果に関する一考察](#)」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』第

- 7号、愛媛大学教育学部保健体育学教室、2010年3月
<https://opac1.lib.ehime-u.ac.jp/iyokan/TD00003993>
- 毎日新聞
<https://www.asahi.com/articles/ASP7Q4G2YP7POIPE03L.html>
 - JOC—オリンピック委員会
 シリーズ連載「東京オリンピックから40年」
https://www.joc.or.jp/past_games/tokyo1964/tokyo40/20041021_tokyo.html
 - JOC—オリンピック委員会
 心に残るオリンピックシーンミュンヘン 男子バレーボール
 『金色の夢舞台』への道のり ～長田渚左
<https://www.joc.or.jp/column/olympic/scene/200904.html>
 - 松平康隆（1981）『松平康隆のネクスト・ワン「限りなき挑戦」』 日本文化出版.
 - 吉田康秀, 濱野隆, 溝口紀子（2004）「バレーボールにおけるジャンプサーブの効果についての研究」 『法政大学体育・スポーツ研究センター紀要』 22, pp.27-33.
 - 下永田修二, 根本研（2007）「バレーボールの試合におけるサーブの重要性について」 『千葉大学教育学部研究紀要』 55, pp.121-127.
 - 笹川スポーツ財団 「オリンピックの歴史：大松博文と松平康隆 オリンピックを身近なものにした」（参照 2024年）.
<https://www.ssf.or.jp/knowledge/history/supporter/09.html>
 - 『月刊バレーボール』 日本文化出版.